

情報化社会と教育 —ケイタイを介したコミュニケーション行動に見る 〈かかわり合い〉の変容—

髻 櫛 久美子

はじめに

近年、我が国では、子どもに関する憂慮すべき様々な問題が起きている。子育て中の虐待、教育現場における、いじめ、学級崩壊、学力の低下、そして社会問題となっている強盗、傷害、殺人等、凶悪な少年犯罪の多発に低年齢化、子どもをめぐる問題は枚挙に遑が無い。⁽¹⁾

教育の領域でも議論は繰り返され、教育課程の改革も行われている。社会の変容に伴う、地域社会や家庭の教育力の低下、受験競争の過熱化等が問題とされ、「生きる力」の育成や、「ゆとりの教育」が提言された。教育内容は削減と学習学年の先送りをされ、本年度から「総合的な学習の時間」の導入と⁽²⁾、週5日制も完全実施となった。ところが、現場の教員達の声に耳を傾けると、改革が行われる度に新しい教育内容の趣旨を理解し、準備をすることに追われ目の前の子どもにゆとりを持って向き合う時間が減らされ、週5日制になったために、ゆとりができたところか短い時間で子どもに触れ合うためには、子どものいない時間にしておかねばならない仕事が増えたという、悲鳴が聞こえてくるのである。現に、生きる力を育てるために導入された総合的な学習の時間も、教員の仕事を増やしただけで、子ども達はなんだか分からない、つまらないといった反応しか示していないところもあるようである。ゆとりの教育というスローガンの基、教育内容を削減して各教科のテキストブックは薄くなったが、ほんとうにゆとりは生まれたのだろうか。週5日制が導入されて、子ども達はのびのびしたのだろうか。現場の教員達は、週5日間やりくりをして教育し、忙しさに追われているばかりで、子どもとゆったり関われるなどということはないようである。

さらに、つい先頃行われた教育社会学会では、

現代(2002年)の教室では平均並みの学力の子ども達も、20年前(1982年)の教室に入ると4割が「おくれ気味」という評価を受けるという衝撃的な比較調査結果が発表された。⁽³⁾ 犯罪については、減るどころか模倣犯罪ともいえる事件が相次いだりしたのも事実である。これらを総合して考えると、これまで行われてきた改革は、目の前の現象に目を奪われ、その表層的な対処法に右往左往しているように見える。

では、何が問題なのだろうか。現代の社会と子どもの変容、子どもだけではない、子どもと大人の〈かかわり合い〉の変容にまなざしを向けることが、問題を解く糸口になるのではないだろうか。現代は、情報化社会といわれて久しい。様々なメディアが発達し、情報が溢れ、情報に押し流されて子育ても、教育も難しい時代である。情報化社会は、驚異的な技術革新の結果であり、我々に様々な恩恵をもたらしたことも事実であるが、目に見えないところで思わぬ影響も及ぼしているのではないだろうか。ケイタイは、メディアのひとつである。あちらとこちらを繋ぐ媒体であり、コミュニケーションの仲立ちをするものである。今日の若者のほとんどが、ケイタイを介してコミュニケーションをしているのであるから、ケイタイが彼らのコミュニケーション行動を規定し、人間関係のありように影響を与えているはずである。情報化社会の最先端で、我々の生活に最も馴染みの深い、ケイタイに焦点を当て、このメディアがコミュニケーションを通して、〈かかわり合い〉にどのような変容をもたらしているかを検討し、教育を見直すための手だてとしたい。

まず、ケイタイが、開発されてきた歴史を概観する。次に、ケイタイコミュニケーションの特性を明らかにする。そして、現実には、身近にいる学生がどの程度ケイタイを活用しているのか、また

ケイタイによるコミュニケーションをどのように自覚的に捉えているのかを簡単なアンケート調査から探る。ケイタイ使用による行動変容についての議論を、資料を参考にまとめ、学生の意識と重ねて検討する。以上のプロセスから、〈かかわり合い〉にケイタイがもたらししていると考えられる影響を考察し、教育的〈かかわり合い〉への提言をまとめる。

第1章 ケイタイの歴史

今日では、すっかり見慣れてしまったが、片手を耳に当て大きな声で独り言を言いながら歩いている若者の姿、薄暗がりの夜道で手のひらを真剣に見つめて歩く姿がとても奇異に映ったのは、ほんの数年前までである。若者が、ケイタイで通話をしながら、あるいはケイタイ画面でメールのやり取りをしながら歩いていることに違和感を覚えることがなくなるのに、たいした時間はかからなかった。あっという間にケイタイは若者に普及したのである。今では大人世代にも普及し、統計資料によると日本における普及率は、50%を超え2人に1人以上の人間がケイタイを持っている。

今年度の本学の1年生のうち約100名と国立大学の1年生から大学院生を含む40名にケイタイを持っているかどうかをアンケートしたところ、100%の学生が持っており、電話に、メールに活用していることが明らかとなった。なぜ持っているのかという問いには、持っているのが当たり前で、相当考えて答えを探した末に、「ないと不便だから」と答えた。中には、なぜこのようなことを聞くのか、質問者に怪訝な目を向ける者すらいた。因みに、生涯学習講座の受講生でケイタイを持っている人は、10%から20%程度であった。学生が100%使用しているとすると、全体の使用者が50%であるから、大人世代の普及率は、かなり低いことになる。

「けいたい」と聞いて、携帯電話を思い浮かべるのが、一般常識的なところであるが改めて「けいたい」という言葉の語義から検討していくことにする。そもそも「けいたい」は、携帯と書く。広辞苑をひいてみると第一義は、携え持つこと、身につけて持つこと（――ラジオ）とある。第二義として、携帯電話と書かれている。広辞苑にも、

「けいたい」イコール携帯電話と表記されている時代なのである。しかし、昭和30年（1955年）初版の広辞苑には、第一義に挙げた意味しか掲載されていない。そして、現代では、死語になってしまったのではと考えられる携帯ラジオの使用例は記載されていない。確かに、トランジスターが発明される以前、ラジオやテレビは真空管でできおり家具のように立派で、持ち運ぶことは用意ではなかったことが改めて思い起こされた。ラジオはポケットにも入るものであるし、CD、MD等との複合機ですら片手で下げて歩くことが可能な現代、ラジオにわざわざ携帯という修飾語を付けるまでもない。

語義から考察すると、「けいたい」とは現代のように携帯電話を意味するのではなく身に携えて持ち運ぶことができることを意味し、それは電話だけではなくラジオ、テレビを初めとする機器に付帯して用いられた言葉なのである。「けいたい」が携帯電話を意味し、さらには「ケイタイ」とカタカナ表記され、ウェブ機能を持つ携帯電話を排他的に意味するようになった歴史を概観してみよう。⁽⁴⁾

分類上PHS、自動車電話、携帯電話を移動電話といい、これらにポケベルを含めたものを移動体メディアと専門的には呼んでいる。そこで、移動体メディアの歴史を溯ると、日本で最初に実用化されたのは、港湾に入港した船舶と地上の電話を結ぶ、「港湾船舶電話」で1953年のことであった。NHKがテレビ放送を開始した年でもある。次は、1956年に列車と固定電話を結ぶ「列車公衆電話」が名鉄特急で始まった。自動車電話へと発展したのは、1979年の事であった。その間、1968年にポケットベルサービスが東京23区で開始され、1987年にNTTがディスプレイ・ポケットベルサービスを始め、NTT以外の新規通信事業者も営業を開始するのと時を同じくして、携帯電話サービスが開始されるに至ったのである。

「移動体メディア」は歴史を見ると分かるように、当初は公共的な場や組織集団の中で使用されていた。携帯電話も同様に、固定電話が引かれていないような場所、例えば工事現場等で、代表者の名義で備えられ社員に貸し出されるという方法で使用され始めたのである。ポケベルも同じく

企業などの組織に導入され、外回りの営業マンが必要な時に持って出たのだ。最初は、呼び出し音が鳴ると、近くの公衆電話から会社に連絡するという「トーンオンリー型」端末であった。1987年に「ディスプレイ型」ポケベルが登場することで、飛躍的な変化が起きた。誰から呼び出されているかが分かることになり、特定一個所から呼び出されるメディアから、様々な相手から呼びだされても対応できるメディアになったのである。こうなると、企業などで用いられるだけでなく、プライベートに用いられるようになり利用拡大が進んだ。使用料が値下げされ、利用者の年齢層も下がり、女子大生や、高校生の個人連絡用のアイテムとして用いられるようになっていった。メッセージを受け取るだけでなく、ポケベルにメッセージをお互いに送りあうというような使われ方をするようになった。数字をならべて暗号解読をするようなポケコトバでのやり取りが、ゲーム感覚で若者にもてはやされた。やがてテンキーを打つと文字変換されるようになった事は記憶に新しい、1994年のことである。この頃から、高校生にポケベルが急激に普及しだした。一方、携帯電話は、自動車電話の延長で、管理職にある中高年の男性の持ち物であった。しかし、機能の進化に伴って、次第に若者への利用を拡大し、1999年にiモードサービスが始まると、インターネット接続が可能になり、マルチメディア化したケイタイは、パソコンでインターネットをするよりも操作も簡単で、経済的にも安価であるということから若者に普及した。そして、ケイタイ片手に、ディスプレイ画面を見詰めて歩く若者が街に溢れ出したのである。

ここまで携帯からケイタイへの歴史を振り返ってみたが、大まかに言えることは3点である。

1. 携帯、携帯電話、ケイタイという順番に発展した。ケイタイの歴史は非常に浅く、急速に普及した。
2. 業務用として利用され始めたものが、次第に個人使用になっていった。
3. 呼び出しという単純機能から、次第にマルチメディア化が進んだ。

ケイタイの発展は、若者への普及を推し進め、

若者の行動変容、あるいは、若者の行動特性を促進したと考える。

第2章 ケイタイコミュニケーションの特性

コミュニケーション行動を規定し、人間関係のありように影響を与えていると考えられるケイタイコミュニケーションの特性を探って見ることにする。ケイタイコミュニケーションは、その他のメディア、固定電話や、パソコンによる電子メールと比較してどのような特性を持っているのだろうか。この点を明らかにすることが、コミュニケーション行動の変容にケイタイがどのような影響を及ぼしたかを知る手掛かりとなるだろう。

ケイタイは、所有者が身に携えて持っているものであるから、「いつでも、何処でも」、「個人と個人をダイレクトに」繋ぐというモバイル性、パーソナル性を特徴とする。固定電話と比較すると、特性は明瞭になる。固定電話は、電話番号により住所が特定できるのに対し、ケイタイは移動体であるから、「今何処?」という一言から会話が始まることに象徴されるように、オフラインで空間的な規制を受けない。

ケイタイは、会社の人や、家族を介さず本人に直接繋がるために、社交事例としての挨拶も必要ないし、かける時間の制約も少ない。また、傍らに誰か、例えば家族の者や職場であれば会社の同僚等がいることを配慮し、通話内容を気にする必要もない。「いつでも、何処でも直接繋がる」ために周囲からの干渉もなく、余計な心理的負荷や摩擦が回避できる。

連絡を待つことなく外出もできるし、何処にいても必要とあれば、連絡を取ることができる。ケイタイを持つと縛られるということもいわれるが、ケイタイで、いつでも何処でもコンタクト可能なので、時間や場所の制約から解放されて自由にいられることも確かである。

時間と場所の制約から解放されたことを享受し、ケイタイのスイッチのオンオフ権、相手の選択権を行使して、自分に都合の良いコミュニケーションを行うことも可能である。知り合った友人とは、ケイタイ番号や、メールアドレスを交換するところから〈かかわり合い〉の第一歩を踏み出す

が、かかってきた電話に出るかでないか、送られてきたメールに返信を送り返すかどうかを、主体的に選択することができるというわけである。そのために有効な機能をケータイは持っている。例えば、電話がかかってきた時に端末画面に現れる発信番号表示を見て答えるかどうかを決める。又は、優先度の高い相手の着信音を変えておくことによって、コミュニケーション相手を序列化し選択する。反対にこのような機能を有効に使用しないと、ケータイに振り回されて、見えない紐で繋がれている、縛られていることにもなりかねない。

マルチメディア化したケータイは、もっぱらメールの受発信端末としても活用されている。ここ2年ほど学生が連絡網を作ると、自宅電話、ケータイ、メールアドレスの3つの欄が全員埋まるのである。そこで、学生200名弱にアンケートをしてみたところ、ケータイ、メール共に100%が利用している、という結果が得られた。

ケータイメールは、パソコンのように立ち上げる手間も要らず、思い当たったらすぐに送信でき、相手を読むまでのタイムラグがないという特徴を持っている。暇な時、気楽に友達とコミュニケーションできるのである。そこで、暇さえあれば、ケータイメールをするという行動が誘発される。通話と違い声を出さない分気楽で、授業中でも、電車の中でも利用できる。このような手軽さが、若者をケータイメールにのめり込ませる理由ではないだろうか。電車に乗り込んで、シートに座ったとたんにケータイを覗き込む習慣がつくわけである。近頃では、電車の中でケータイを覗き込むのは、何も若者に限ったことではない。ある時には、シートの両側の乗客が何やら熱心にケータイを見ているので、何をしているのかと興味を押さえられずに、目をやると囲碁ゲームをしているのである。電車の中で、片時も何もしないでは要られない、憑かれたかのように端末のボタンを押す姿は、何やら無気味さえに感じらる。

第3章 学生のケータイ使用とケータイコミュニケーションの特性の自覚について

近頃は、街の中で若者がケータイを片時も離さず文字どおり携帯し使用する姿が、当たり前前の風

景となった。学内では研究室の前の通路で、会話の一方の声だけが声高に聞こえてきても、別段奇妙な思いにとらわれることもなくなった。「講義中はケータイをマナーモードにするように」などという注意を何度も繰り返す必要もなく、学生たちはマナーを身に付けて、ケータイをなくてはならないものとして使いこなしているかに見える。実際のところ、学生がどの程度ケータイコミュニケーションの特性を自覚し、ケータイによる行動への影響をどのように考え利用しているのかを知るために、アンケート調査をしてみた。

対象学生は、名古屋柳城短期大学の保育科の2年生189名（女性185名と男性4名）。

調査実施は2002年9月

質問項目は、以下6項目である。

1. ケータイを持っている／いない
2. ケータイメールをする／しない（すると答えたものは、1日あたり何通か）
3. 1ヶ月のケータイ使用料金はいくらか
4. 誰が使用料を支払うのか
5. ケータイコミュニケーションの利点は何か
6. ケータイコミュニケーションによる不利益は何か

（5、6は自由記述で複数回答とした。）

結果

1. 2. の回答からは学生は100%ケータイを持ち、メール活用もしているという事が確認された。
3. 1月の使用料
5000円以内32名（17%）
5000から10000円までは98名（52%）
10000から15000円まで35名（19%）
15000円以上は20名（11%）
親が支払っている等の理由でわからない4名（2%）
4. 使用料はほとんどの学生が自分で支払っている。
5. ケータイコミュニケーションの利点
すぐに連絡がつく（114名）
メールなら、口にだしては言えないこともいえる（20名）
暇つぶしに便利（16名）
待ち合わせに便利（16名）

本人に直接繋がる (9名)
 友達といつも繋がっている (7名)
 調べたいことがすぐに調べられる (電車の時刻、目的地までの所用時間等) (5名)
 用件を伝えるのに便利 (5名)
 気軽にできる (5名)
 友達の番号を覚えなくてよい (3名)
 漢字が調べられる、計算ができる (それぞれ2名)

6. ケイタイコミュニケーションによる不利益
 お金がかかる (77名)

縛られている (12名)
 何かに取り組んでいる時にかかる (12名)
 親にすぐ捕まる (10名)
 時間帯を気にしない連絡 (4名)
 何処にいてもパレル (2名)

ケイタイ依存になる (なしでは要られない、家に忘れてくると不安になる) (36名)
 いたずらや、迷惑メールや電話がかかる (21名)
 誰からも連絡が無い日は、不安 (2名)
 連絡を取りたい人から反応が無いといらする (3名)
 すぐメールを返さないと怒られる (3名)

メールでは、喜怒哀楽、本心が分からない (5名)
 メールが多くなり人と話さなくなった、手紙が減った (5名)

周囲への迷惑が気になる (電車の中のマナー、医療機器への影響、公共の場での着信音) (10名)
 漢字変換機能使用で、漢字が書けなくなった (ケイタイで調べるので、辞書を引かない) (5名)
 番号が覚えられない。 (2名)
 時間にルーズ、打ち合わせがアバウト (2名)

学生は、ケイタイが時間的空間的制約から自由

なコミュニケーションであることを、最も便利な特性として認めながら、一方で、連絡を受ける側としては、一生懸命に何かに取り組んでいる最中にも構わずかかってくることや、遊んでいる時にいつでも親から小言を言われること等から、縛られている感じや、監視されているような不自由さも感じている。いつでも何処でも、繋がることの利点は、待ち合わせに最も有効に活用されているようである。一方、待ち合わせの時間がルーズであったり、約束の仕方や、打ち合わせがアバウトであるという指摘もある。

また、気楽にメールでコミュニケーションが取り易いことに、遠くに居ていつも会えない人と連絡しあえる便利さを認めながらも、メールの無い日を不安に思ったり、連絡が欲しい相手からメールが返されないことにいらいらしたり、反対にすぐメールを返さないことで友達から怒られたりする不都合さも感じている。電話や、手紙での連絡が減ったこと、直接話す回数が減ったことをマイナス点とも捉えている。便利さを認め使い慣れている反面、ケイタイに依存しすぎて、何よりもケイタイが無くなったら、友人との連絡が取れなくなること、連絡先が分からなくなってしまうことを気にしている。

興味深いのは、1月の使用料が多いか少ないかにかかわらず、約半数の学生がケイタイの使用料金を高い、使いすぎと考えていることである。利点として暇つぶしにケイタイを用いるということと総合的に考えると、不必要に無駄にケイタイを使用しているという自覚を、学生が持っているということになる。ケイタイをインターネット接続して色々調べて便利という回答の少なさ、せいぜい、時刻表を調べることができて便利といった程度の反応しか見られなかったことから推察すると、料金がかさむのは、もっぱら通話やメールによる友達とのグルーミングコミュニケーションに使用しているからのようである。

第4章 ケイタイコミュニケーションに見る 〈かかわり合い〉の変容

第1章で明らかとなった、急速な発展と普及、ケイタイの個人化(パーソナル化)、マルチメディア化、そして第2章で考察したケイタイコミュニ

ケーションの特性、第3章での学生を対象にした調査を統合すると、何が見えてくるであろうか。

学生の回答を見ると、学生たちはケータイを通して、メールに活用し、ケータイというコミュニケーション媒体の登場によって行動に影響を受け、使用している本人たちもある程度はそれを自覚しているといえる。ケータイコミュニケーションの特性と、学生たちの意識とを重ね、利用者の意識の外にある影響をも考察の対象とし、〈かかわり合い〉の変容について検討する。おそらく、これから検討の対象となる行動変容は、様々な要因により引き起こされたものが、ケータイというメディアにより促進されたといったほうがよいだろう。また、更なる研究調査のための方向づけという意味で、議論が荒くなることを恐れず私見を述べてみたい。

昨今、現代の若者や子ども達は、社会力が低下しているといわれる。⁽⁵⁾ 社会を構成し、よりよい社会を築き上げていくべき社会の一員としての自覚と、能力が足りないということである。これは、公である社会の領域に個の領域が侵食してきていることに関係しているのではないだろうか。このように考えると、社会力の低下は、私事化感覚の増殖ということもできるだろう。具体的には、批判の対象となっている公共空間での、人目を気にしないかのような若者の立ち居振舞いがその一つである。例えば、電車やバスの中での化粧、通路、階段での地べた座り等である。一方、社会の基本単位である家庭の中にも、家族の一員としての認識が欠けた私事化の傾向はある。例えば、パチンコやゲームセンターに幼児を連れていく親、その上、駐車場で車に乗せたままにし、脱水症状を起こした幼児が死亡するという事故も後を絶たない。これらは、親であることより個としての欲求充足を優先したために起きたのであって、子育て中の親の私事化の現れだと考える。

これらの行動は、個に力点を置き、個性を尊重した教育にその一因があるともいわれてきた。確かに、教育への批判は見のがせない。一方、社会力の低下傾向や、私事化傾向を促進する事に、ケータイコミュニケーションも荷担していることを見落としてはならない。ケータイコミュニケーションの最大の特徴は、「いつでも、何処でも、プ

ライベートコミュニケーション空間」ということにある。「ケータイのある場所=自分のプライベート空間という認識」が、ケータイの普及により定着し、公共空間にプライベート空間がいつでも作り出せ、プライベートな欲求をいつでも何処でも満たすという傾向が出てきて、私事化が促進されたと考えるからである。少し、順を追って解説してみよう。

ケータイができる前は、友人と連絡をとるためには、家に帰る必要があった。公衆電話では、相手が家に居る保証がなくては繋がらないからだ。そして、家電話ならば、家族の人に取り次いでもらう場合もあった。ケータイならば、住所不定でも、仕事時間でも授業中でも、深夜でも「自分だけの電話ボックス=プライベートコミュニケーション空間が作れるのだ。」

子ども部屋を持ち、そこに、テレビや、ステレオ、電話の子機などを備えて子ども時代を過した現代の若者世代は、その個室はプライベートな空間であると認識している。「そのプライベート空間がケータイとともに、本来公共の空間であった場所に持ち出されている格好だ。まさに空間を携帯している」のである。⁽⁶⁾ 公共空間が、ケータイを携帯することにより、プライベート空間化し、私事化感覚が増長してしまうのである。

次に、ケータイが家族のコミュニケーションに及ぼしている影響を見ていくことにしよう。家庭の教育力の低下といわれて久しいが、ケータイコミュニケーションは家庭の教育力の低下にも、私事化を促進することで影響を及ぼしていると考えるのである。

「プチ家出」⁽⁷⁾、「プチ同棲」と呼ばれる現象がある。⁽⁸⁾ ケータイがあれば、いつでも連絡が取れることに安心して、若い娘が1週間くらい家を空けても親が心配しないということもあり、若者を中心に増えている現象である。「親にすぐ連絡がつく(から親を心配させないですむ)」、反面「(友達と遊んでいる時に) 親から電話がかかって、鬱陶しい」という学生の回答から、ケータイが親子のコミュニケーションに活躍していることは確かなようである。宿泊まではしなくとも、最近、深夜まで女子学生がアルバイトをしていることを耳にする機会が増え、なぜ親が許可するのだろう

かといふかしげに思ったものだが、ケータイという連絡手段が心配を軽減させているのだと、今更ながらに納得するところである。それにしても、1週間も家に帰らないという行動を、親が小言程度で済ますことができるとはどういうことであろう。ひとつの屋根の下に毎日帰ることつまり、住まいという空間を共有することで、家族の維持を確認しあうことが必要と思われなくなってきているとあって良いのだろうか。ケータイで繋がっていることで、家族についての「空間的境界概念」に変化が起きているとあってよいであろう。

さらに、意見をされたり小言を言われたくない場合は、家族が外出先からそれぞれお互いのケータイに伝言や留守電をする、すると皆が無機質なケータイに語りかけて、何日もケータイを介してしか家族の声を聞くことがないような事態も起きてくる。

家という家族の住まう空間から、家族の人間関係のありかたを考察した藤原智美は、「現代家族のコミュニケーションが希薄であるということ」を、夫婦間の軋轢、親子間の断絶だと考えるのではなく、「個々人のなかで、『家族性が失われている』と見ている。『ぶつかり合っている』のではなく、ただ『外へこぼれていっている』だけなのだ」⁽⁹⁾と解釈している。

近代に入って登場した「個人」は、教育の領域では、自我形成という視点から「個としての主体」の強調につながった。その上、日本では高度経済成長期の消費社会の発展により個は次第に力を強めた。住まいにおける個室、その個室にテレビを始め電話等を個別にしつらえ、「ワタシ族」(私という意識が何よりも高い人)が生まれることに平行して、「カ族」(家族を構成する、家族の一員であるという意識の高い人)が減っていった。それをさらに強力に推し進めたのが、情報化社会である。以前は、新聞、ラジオ、テレビが各家庭に1台ずつしかない時代、入ってくる情報は家族単位で一本化されていた。情報を家族で共有していたのである。今は、父親、母親、子どもそれぞれが、情報ソースが違うのであるから、家族が噛み合わなくなっているのはいうまでもない事である。⁽¹⁰⁾この傾向に、ケータイはさらに拍車

をかけていると考える。藤原は、子どもの非行が家族の衰退から起きているというよりも、その背後に家族の一員であるはずのそれぞれが「ワタシ族化」していることにあると言っている。

情報源の個別化だけでなく、ケータイは家の中に目にみえない壁を瞬時に作り出す。家族が一緒に食事をしていたとしても、一度、ケータイの呼びだし音が鳴り、ケータイで話し出したとたんに、そこに存在する他の家族は「見えない壁」の外に、つまり「情報の壁」の外においやられてしまうのである。現実には、存在するのにもかかわらず、ケータイを介して見えない世界と繋がったとたんに、そこに存在する人は無視され、存在を認められないことになる。ケータイが、家族の中に見えない壁を作り出し、私事化を推し進めているのだ。

では、ケータイのマルチメディア化という特性は、〈かかわり合い〉行動にどのような影響を及ぼしているであろうか、検討してみよう。

ケータイをメールの端末として活用すると、デスクトップのように立ち上げる手間も要らず、思い立ったらすぐ送信受信でき、相手を読むまでのタイムラグがない。そこで、常に早く応答するという傾向が出てきている。企業では、顧客へのサービスもスピードが要求されるようになったといわれている。友人関係も、返答に時間をかけないことがよしとされるようになり、すぐ返ってこないのは無視されたような、人間関係の関係度が相手から低いランクをつけられたように感じるなど、阻害されたような意識を持つ。だから、逆にそう思われたくない時は、即座に返答することが要求され、常に繋がっていることに監視されているような、管理されているような不自由を感じている人も少なくないようである。このように、応答にスピードが要求される背後には、便利だがついてくるゆえに誤解を生じるケータイの機能が見え隠れしている。かかってきた電話に出るかでないか、送られてきたメールに返事を送り返すかどうかを、主体的に選択することができる有効な機能をケータイは持っている。先の章でも述べたように、電話がかかってきた時に端末画面に現れる発信番号表示を見て答えるかどうかを決めたり、優先度の高い相手の着信音を変えて

おくことによって、コミュニケーション相手を序列化し選択することができる。この機能があるために、余計な気遣いが必要となる。この機能を使っていないことを相手に信じてもらうためには、即答がもとめられるのである。

ここで、これまでの〈かかわり合い〉のありかたに慣れ親しみ、複雑な機能を利用することが苦手な高齢者の利用実体を、比較のため取り上げてみる。生涯学習センターで講義を担当した時、50人未満の受講者のうちケータイを持っているのは、10%から20%に過ぎなかった。使用している人が少ない中高年の人々は、実際にケータイについてどのようなイメージを抱いているのだろうか。聞き取りにより得たところをまとめると、ケータイを持つことで、繋がれて、縛られている様でいやと感じているようである。高齢者で、ケータイを持っている人は、子どもや孫から、「何かあった時のために持っていたほうが安心だよ。」と説得されたというケースがほとんどである。子どもは、離れて暮らす親を心配して緊急の場合を想定して言うのであるが、持たされた親は、子どもに鎖をつけられたようだと感じているようだ。「『何かあったとき安心できる』のは高齢者自身ではない。むしろ、離れた場所にいる家族にとって『安心』なのだ」。(11)

これは、高齢者がスイッチや、チャクメロの操作が簡単にできない、機能を使いこなせないということだけではない。固定電話、しかもナンバーディスプレイができない電話に慣れ親しみ、かかってきた電話には必ず応答するこれまでの生活習慣から、相手を無視するような形で、選択的にコミュニケーションする〈かかわり合い〉の仕方になれてないためであると考える。

若者も、日常つき合っている仲間どうしの間では選択的応答はできずに、逆にそのような機能を用いていないことを表明するために即答することに気を使っている。根源的な人間の欲求である自分自身でありたいと同時に、人と繋がっていたいという欲求のジレンマを、ケータイが増幅しているようである。

また、メールは、コンピューターの場合とは違って字

数の制約があるため、簡潔に短い文章で意志疎通を図ることになる。したがって、手紙のような事項の挨拶も必要なく、短いメッセージのみで良い。アンケートの回答にもあったが、文字以外の情報を含まないメールは、感情がダイレクトに伝わることもなく、会話が途切れ沈黙するといった気まずさも回避でき、コミュニケーションをとるのには、心理的負担がすくなくてすむといった利点を持っている。一方、送り手の感情が文字情報から伝わりにくいということは、受け手の感覚で行間を読むことになる。受け手が、送り手との〈かかわり合い〉に不信の念を多少とも抱きはじめると、受け手の解釈だけで溝は深まって、人間関係が悪くなることもある。もっと厄介な事は、シンプルな要件のみのメールが、受け手の心理状態によって送り手の意図とは無関係に、思わぬ誤解を生むこともあるようだ。

メールによる〈かかわり合い〉のみに限定し、直接会うことのない関係ならば、どんなに行き違おうとも仮想世界だけの関係として、いつでも関係を断ち切れるのだから問題はない。そこで、極端な例として、まさに人間関係の問題であるが、ケータイ依存症と呼ばれるものがある。ケータイやパソコンとは向き合うが、現実の世界との接触を極端に減らし、引きこもってしまうケースである。これは、住宅関連からのアプローチから、子ども部屋がいわゆる勉強部屋として与えられたことも、引きこもりの一因だという指摘もあるが、ケータイの普及も関係ないとは言えまい。目の前の人に向けて、相手の表情を読み取りながら、身体を用いて自己表現をすることをメールコミュニケーションは免除しているからである。しかし、実際は、メールコミュニケーションだけではすまないのも、メールコミュニケーションによってできた関係のひずみはお互いに直接やり取りして嫌われたり、傷ついたりしながら、埋め合わせるしかないのである。ところが、心地良い相手との差し障りのない話題、そして心理的摩擦のない関係を対人コミュニケーションとして求め、ケータイメールを活用していることにより、傷つくことへの免疫ができていないので、関係修復は容易ではないのである。

第5章 ケイタイを介した教育の可能性

マルチメディア化したとはいえ、サイトの利用は経済的な負担がかかるし、ケイタイコミュニケーションは、今のところもっぱら通話とメールに活用されているようである。しかし、今後利用が進めば、豊かな世界が繰り広げられる可能性も高い。そのあたりの議論もまとめておくことにしよう。

ケイタイは、目に見えない世界とも、リアルタイムで繋がっていることを可能にしている。ケイタイを持つことで、リアルな世界と、ネットの世界の両方を生きることになる。

オフラインだから、離れた場所に居ながらにして、同じ月を見て俳句や短歌を読み伝え合うということも可能で、情報の伝達以上のもの、すなわち経験や感動の共有も可能にする。⁽¹²⁾

携帯電話がウェブ接続したために、インターネットを使用する人が増えれば、情報交換がさかに行われるようになる。「例えば、『子育てサイト』に、ある若い母親が『これこれこういう事で困っている』という質問を掲示板にはりつける。すると、自分はこうやって解決したと答えてくれる人がたいてい現れる。でも、その答えてくれた人がもともと自分が解決策を知っていることを自覚していたかということ、そうではない。誰かの問いかけという呼び水があって、初めて『そうだ、私の経験が役に立つかもしれない』気づくわけです。』⁽¹³⁾この例は、「暗黙知を顕在知化」するのにケイタイが一役買っていることを示している。知的所有権の問題についてのルールづくりも必要だと指摘した上で、このように、「情報は共有すればするほど豊かになるし、自分が与えた分だけ自分に返ってくる」⁽¹⁴⁾と、インターネットの利点を述べたものもある。この発想は、教育についても援用できる。ネットで、互いに教え学ぶ関係を、教育者と被教育者の役割分担をすることなく、時には入れ替わりながら共に学習する場が、ネットの世界にある。しかし、ここで、問題となるのは、目にみえない関係であるから、文字情報だけで、内容の信頼性、信憑性をいかに判断するかということである。

経験の共有や、潜在的知識の顕在化などに活用されれば、〈かかわり合い〉の世界も豊かなものに

なると思われ期待したいところである。

おわりに

情報化社会において、ケイタイコミュニケーションを教育に導入すれば、先の章でも述べたように、教育的〈かかわり合い〉を豊かな方向に展開する可能性があることをも認めよう。しかし、ケイタイコミュニケーションは、いつでも何処でもプライベート空間という感覚から、私事化の傾向を促進しているようだ。社会の一員、家族の一員としての自覚が低下し、個としての欲求充足を優先させるがために、社会力、家族の教育力が低下していることを考慮し、現代の情報化社会に見合った教育のありかたとして、まず第一に、ケイタイリテラシーを教育の中に導入すべき事を提案する。

私事化を食い止めるには、いかなる教育が効果的なのか。ワタシであると共に家族の構成員であることを自覚し、社会についても同様で、社会の構成員としてどのような役割をになうべきかを考えることのできる人間を育てることが必要となる。学校教育の中で、現在、ボランティアや、世代間交流に関すること、実践、実習という形で取り入れられてはいるが、このように目にみえる形で、何かをするということと同様に大切なこととして、人間形成、アイデンティティ形成という点から、第二の提案をしたい。

アイデンティティ形成が十分になされないと、「自己充実欲求」と「整合希求性」⁽¹⁵⁾とのバランスが取れず、〈かかわり合い〉は阻害されてしまう。⁽¹⁶⁾アイデンティティ形成が、教育の重要なテーマであることに異論を唱える人はいまい。しかし、現実にはどれだけ意図的に教育的営みとして取り組まれているかは、はなはだ疑問である。

アイデンティティ形成には、想像力が重要な働きをする。なぜなら、想像力の本質は、自分を見詰め自分を表現することだからである。自分と向き合い、自己と対話することでアイデンティティが形成されるのであるから、想像力なくしては、アイデンティティは形成されない。自分と向き合うためには、孤独な時間が必要であり、理由のない退屈な時間を耐え紛らわすことで、想像力が鍛えられることを、ガストン・バシュラールは強調

している。⁽¹⁷⁾ 退屈な時間を耐え想像力を育むために、外界からの情報を遮断し孤独な時間、空間を作り出すことは、情報化時代の現代にあっては、意図的にあえてしなければならない難しいことである。

一方、発達論的に見た時、アイデンティティ形成は他者なくしては成り立たないことを、これまで他の論文⁽¹⁸⁾で主張してきた。他者との同一化を繰り返した末に、他ならぬ私へと発展し、アイデンティティが形成されることを論じてきた。他者との同一化は、私を他者に見立てるのであるから、想像力により可能となる。この観点からも、アイデンティティ形成過程において、想像力はなくてはならないものである。

さらに、他者との同一化は、わたしと他者を重ね合わせるのであるから、他者の立場になり、他者の身にわたしを置き換えるのである。他者なくしては主体的自己が形成されないことを身を持って経験するプロセスである。このプロセスを十分に経験する事は、他者への配慮性を育て、私事化傾向を抑制する事に繋がるであろうと考える。

以上の議論から、アイデンティティ形成過程に私事化を抑制する力を発達させるプロセスが含まれており、そこでは、想像力が重要な働きをしていることが明らかとなった。したがって、教育的営みの基軸にアイデンティティ形成を置き、想像力を鍛えるための退屈な時間を確保することを提案する。いつでも何処でも繋がるために即答を求め合い、常にケイタイコミュニケーションをしていたのでは、想像力は育たない。まず手始めに、ケイタイのスイッチを切って、孤独に向き合い、退屈に耐える時間を作ることを子どもに奨励するべきであろう。また、ゆとりの時間は、何かをする時間として設定するのではなく、退屈な時間を紛らわせる力を鍛える時間とすべきである。

註

1. 近年、学校教育現場に起きた事件、青少年犯罪には、以下のようなものがある。

① 1997年5月 神戸連続児童殺傷事件：中学校3年生の男子生徒が、中学校の正門に小学校6年生の男子の切断した頭部を

置き、「酒鬼薔薇聖斗」の名で犯行声明文を出した。この男子は、これ以前に、小学生を対象に殺傷を数件起こしていた事が、後になって判明した。

- ② 2000年1月 新潟少女監禁事件：9年2ヶ月にわたって少女を拉致監禁した。
 - ③ 2000年 名古屋市の中学校で、同窓生同士による5000万円恐喝事件。
 - ④ 2000年5月愛知県豊川市主婦刺殺事件：17歳の男子高校生が主婦をめった刺しにして殺害した。
 - ⑤ 2000年5月高速バスジャック事件：17歳の少年が、バスを乗っ取り乗客を人質にし、1名を殺害、2名に傷害を負わせた。
 - ⑥ 2001年6月大阪教育大学教育学部附属池田小学校事件：侵入者により、23名の児童と教職員が殺傷された。内、死亡者は8名である。
2. 総合的な学習の時間は、小中学校が平成14年度から、高等学校が平成15年度から実施。
 3. 耳塚寛明（お茶の水大学教授）他6名、「学業達成の構造と変容（3）—関東調査に見る階層・学校・学習指導—」、日本教育社会学会第54回大会（於広島大学）、2002年10月22日に発表。
 4. 岡田朋之・松田美佐編、『ケイタイ学入門—メディア・コミュニケーションから読み解く現代社会』、有斐閣選書、2002年を参考にまとめた。
 5. 門脇厚司が、社会力の低下について以下の文献で論じている。
『子どもの社会力』、岩波新書、1999年。
『社会力（いきるちから）が危ない』、学習研究者、2001年。
『「大人」の条件—「社会力」を問う』、岩波書店、2001年。
『学校の社会力—チカラのある子どもの育て方』、朝日選書、2002年。
 6. 吉水由美子、『「漂い系」の若者たち』、ダイヤモンド社、2002年、p.119。
 7. 竹村真一、小此木啓吾他、「ケイタイがひらく新しい文化」、『三田評論 特集 ケイタイ文化論』、2001年4月号、pp.10-23.所集、p.17。

8. 藤原智美、『家族を「する」家』、プレジデント社、2000年、p.241。
9. 同上書、p.240。
10. 同上書、p.236-244。藤原は、「ワタシ族」、「カ族」ということばを用いて、情報化社会における家族関係の変容を論じている。括弧内の説明は、筆者が補足的につけたものである。
11. 岡田朋之・松田美佐編、『ケイタイ学入門』、p.220。
12. 『三田評論 特集 ケイタイ文化論』、2001年4月号、p.12。「iモード俳句」についての記述がある。
13. 同上書、p.13。
14. 同上書、p.14。
15. 鯨岡峻、『両義性の発達心理学—養育・保育・障害児教育と原初的コミュニケーション—』、ミネルヴァ書房、1998年。養育者と子どもの関係は、繋がれていたいという欲求、「繋合希求性」と一個の主体であろうとする「自己実現欲求」という根源的な両義性によって成り立っていることを論じている。
16. Erich Fromm, *Escape from Freedom*, Holt Rinehart & Winston, 1941. において人間が成長、発達していく過程は、「個性化 (individuation)」が進められていく過程であり、子どもが他者から分離していく過程でもある。分離が進むと孤独になり解消しがたい困難や矛盾に直面することを論じている。
17. Gaston Bachelard, *La Poétique de L'espace*, Presses Univairsitaires de France, 1957, 岩村行雄訳、『空間の詩学』、思潮社、1969年、家という空間と孤独と想像力について第1章で論じている。子どもにとって孤独が大切なことを主張している。(pp. 51-52)
18. 髯櫛久美子、「システム社会における保育の構造—大人と子どもの教育的関係を中心に—」、名古屋柳城短期大学『研究紀要』No. 21、pp.125-136。

Education in an Information-Oriented Society: Changes of Involvement Depending on Communication by the Use of Cellular Phone

Bingushi, Kumiko*

Today, the use of cellular phone in Japan has become widespread especially among its youth. Thus it is important to study the effects of cellular phones on “involvement” and to identify the problems in communication behavior.

This paper describes the development and spread of cellular phones as a communication tool, examines specific characteristics of this new form of communication via cellular phone and analyzes results of survey on cellular phone usage and its influence on the users' communication. The study's hypothesis is that using cellular phone makes a person think he/she is engaged in a private space whereby encouraging his/her personal behavior. This may hinder one's ability to learn social skills necessary to take the responsibility upon oneself.

Two points were proposed: First, the cellular phone literacy is needed in cellular phone communication because it breaks relationship with the present person; Second, children should have plenty time to identify others sufficiently to form their identity. The reason is that the sympathetic experiences in childhood facilitates children's consideration of others and inhibit privatization that means private behavior in public space.

キーワード：ケイタイ (cellular phone), 〈かかわり合い〉 (involvement), 私事化 (privatization), 社会力, アイデンティティ (identity)